

〈エッセイ〉

白昼夢としての街歩き

ナジャとペイティさん、「向こうから来る女」の系譜

山崎 百合子

「美は瘡癩的なものだろう、さもなくば存在しないだろう¹。」これはシュルレアリスムの生み出した傑作の一つである、アンドレ・ブルトンの『ナジャ』を締めくくる有名な一節である。街を歩いているときに、ある「偶然の出会い」から世界に裂け目が生じ、日常が一気に非日常へと転化し「真の人生」を垣間見るたぐい稀な瞬間を生きることがある——『ナジャ』に描かれているのはそのような体験の美しい記録である。語り手のブルトンは、「あのまったく手持ち無沙汰で、ひどく気の滅入る午後のひとつの終わりごろに²」、パリの街頭で「ナジャ」と自称する女に出会い、不思議な偶然的事実の連鎖に満ちた奇跡的な愛の数日間を過ごす。しかし、その奇跡は長くは続かず、ナジャは精神病院へと入り、「あの世の全てがこの生のなかにある³」という、確信は再び揺らいでしまう……。

『ナジャ』のような作品とは全く異質なものであるには違いないが、街そのものを題材にした現代日本のエッセイ漫画の名作、清野とおるの『東京都北区赤羽』シリーズ⁴も実はまた、超現実的想像力に満ちた作品だと言えよう。赤羽とは東京の北部に位置し、庶民的で活気ある飲屋街のある、昭和の面影を色濃く残す街であり、この作

1 André Breton, *Nadja*, *Édition entièrement revue par l'auteur*, Gallimard, « folio », 2010, p. 190. 以降 *Nadja* と表記する。

2 *Nadja*, p. 71.

3 *Nadja*, p. 172.

4 『東京都北区赤羽』は2008年から2012年まで、続編である『ウヒョッ！東京都北区赤羽』は2013年から2019年まで、トータルで10年間にわたって連載された。

品は売れない漫画家であった作者が赤羽に引っ越してからの日常を描いたものだ。彼の描く赤羽——それは常に作者＝語り手によって体験された事実であり、作中にはほぼ必ず写真が添えられているのは何かしらブルトンの「ガラスの家⁵」という表現を喚起する——はいつも奇妙な磁場を成しており、清野が街を歩くたびに殆ど魔術じみた仕方である店が突如として出現したり、不思議な人物が信じられないような「偶然」により登場したりするのである。語り手は街角の偶然がもたらすそれらの出来事に呆気にとられ、しばしば「夢ではないのか？」と自問する。時には主体の意識そのものが酩酊状態にあること、そしてそうでなくても語り手の日常の生活空間である街中に非日常の出来事が突如生起することによって、理性的な現実と夢や妄想との境界は揺らいでしまう。赤羽という街がそもそも移り変わりやすく、人の入れ替わりや繁華街の店々の栄枯盛衰が極めて激しいということ、つまりこの街が非常に動的な空間であるということが作品世界のそうしたありようと深く関わっていることは確かだ。しかし清野の描く赤羽は、理性的な仕方では解釈できるそうした動性以上の何か不思議な力によって様々な出会いを語り手にもたらし、『北区赤羽』シリーズの物語はそのような出会いによって次々に展開されていく。通り慣れた路地に見慣れない廃墟が出現したかと思えば前にたまたま行った店を再び見つけようとしても容易に見つけることができないこの街の地図は、理性による明晰な把握をどこかで拒み続け、語り手は街のそうした底知れない混沌とした暗がり魅了されて酩酊しながらの遊歩を日々繰り返す。

語り手が赤羽の街をぶらついていると、実に様々な、かつ珍妙な人物に遭遇する。全身赤い服を纏って闊歩する老人、自分で派手に飾り立てた自転車を乗り回す「便利屋さん」、あるいは夜な夜な密かに街の掲示板に怪異な書き込みをする男性。街中で生起する、見逃されてしまいそうなそうした様々な自己表現を、清野とおおの眼差しは掬い取り漫画へと結実させている。そしてこの作品で最も重要な登場人物の一人は間違いなくホームレスの「天才アーティスト」であるペイティさんであろう。赤羽の

5 『ナジャ』の冒頭においてブルトンは、知り合いの作家が、ヒロインのモデルが誰かが分からないように髪の色を設定を変えた、と言ったことを「破廉恥」と非難し、その後「私は実名を要求し続け、開けっ放しの扉のようにばたつくままにされて、その鍵を探さなくても済むような本にだけ興味を抱き続ける。[中略]私はといえば、ガラスの家に住み続けるが、そこではいつでも誰が私を訪れたかを人は見ることができ、天井や壁に吊られたものは全て魔法のようにとどまっただけで、夜、私はガラスのベッドにガラスのシーツをひいて休み、私である誰か、が遅かれ早かれダイヤモンドに刻まれて現れるだろう。」(Nadja, p.18-19.)と書いている。超現実とは創作ではなく、実名で記述されるような現実内に内在するという考えが表明されていると理解される。

駅で初めて彼女に出会ってからというもの、語り手はますます赤羽という街の持つ奇妙なエネルギーの作用に巻き込まれてゆく。ペイティさんは、彼女自身がアーティストであると同時に、漫画家にとっては創作活動にインスピレーションを与えてくれるミューズでもあり、そうした彼女の肖像は「いつも靈感を受け靈感を与えながら、街路という彼女にとってただひとつ価値のある体験の場にいることだけを好んでいて、街路で、なにか大きな夢に身を投じているすべての人間の問いかけに応じることできた、あの女⁶」という『ナジャ』の記述とどこか奇妙に似通ってしまう。

定まった家を持たず、街の只中で生活を営み、路上で芸術活動をしているという点でペイティさんにおいては生活の場である街角がそのまま創造の舞台となっている。第2巻の第14話「赤羽公園衝撃ライブ」における「嗚呼・・・これら街の雑踏の全てがペイティさんの歌声の前では心地よいバックコーラスと化してしまう、ペイティさんは赤羽の街と一緒に歌っているんだ・・・！！⁷」という台詞は、彼女のパフォーマンスが、その舞台である公園に響いている人々の声やカラスの鳴き声、果ては石焼

き芋屋の呼び声と渾然一体となって繰り広げられることによって受け手に強烈な印象を与えていることを示している。

赤羽公園で頬被りをしてゴミ箱から拾ったゴミ袋を叩きながら自作の歌を歌い、遭遇するたびごとに自分の作品——絵や文章、カセットテープの録音など多岐にわたり、時には自分の皮膚そのものを清野に贈ったこともある——を披露してくれるペイティさんの存在はあまりに突飛で、とても実在するとは信じがたい。だからこそ語り手は写真にその姿を撮り続ける。だがそれでもなお、語り手にとって、そして語り手を通じてペイティさんと出会っている読者にとっても、写真という「動かぬ証拠」を前にしても彼女の存在はどこか現実世界の枠組みに収まらぬ何者かに感じられ、それゆ



清野とおる『東京都北区赤羽』第2巻、電子書籍版、Bbmf マガジン、2011、10頁。

6 Nadja, p.133.

7 清野とおる『東京都北区赤羽』第2巻、電子書籍版、Bbmf マガジン、2011、10頁。

えペイティさんの、そして『東京都北区赤羽』という作品そのものの魅力はいや増しているのではないだろうか。そしてそれはもちろん、日常生活を送っている中で突如接することになるペイティさんの奇矯な振る舞いがあまりにも常識から逸脱しているから、という理由にもよるだろうが、それ以上に、清野にとってペイティさんが街のどこかで「偶然」にしか邂逅できない存在であることに大きく依拠している。清野は、住所不定で連絡先を持たないペイティさんのことを自ら訪うことはできず、街をぶらつく中で彼女との遭遇の機会が向こうからやってくるのを待つしかない。そしてその遭遇の機会が訪れ方というのが、清野にとっては超現実的で不思議な力の支配下にあるように感じられているのだ。ペイティさんに会おうと狙っている時はなぜか会うことができず、「彼女の存在を忘れた無意識のときに限ってヌッと現れる⁸」、あるいは、大事な友人を連れてくるような、ここぞ、という時などには出てきてくれる……このようなペイティさんの出現をめぐる奇妙な偶然について清野は作品内で繰り返し言及する。『ウヒョッ！東京都北区赤羽』の第6巻69話において、作者は「ペイティさんはラジオのチューニングのように周波数があった人にしか見ることができないんじゃないか⁹」と書く。この言葉は、一見一枚岩的に見えるこの日常世界には別世界へと通じる亀裂が存在し、電波を受信するように受動的にしかその裂け目に到達できないという、この作品に通底する感覚を要約しているように感じられる。そしてそれはまた、ブルトンの「あの世のすべてがこの生のなかにある」という言葉とも響きあうような感覚である。さらに語り手は、ペイティさんとの邂逅の仕方から、彼女が自分の創作世界と実世界を行き来しているのではないかとすら感じ始める。曰く、「ペイティさんって会えないときは数ヶ月単位で会えないんだけど、ペイティさんが登場する回の漫画を描いている時はほぼ毎日遭遇するんだよな」「俺が漫画で描くペイティさんと現実のペイティさん……この両者は確実に『繋がっている』



清野とおる『ウヒョッ！東京都北区赤羽』第6巻、電子書籍版、双葉社、2019、102頁。

8 清野とおる『東京都北区赤羽』第4巻、電子書籍版、Bbmf マガジン、2010年、122頁。

9 清野とおる『ウヒョッ！東京都北区赤羽』第6巻、電子書籍版、双葉社、2019、137頁。

と何度も実感させられたっけな¹⁰」。写真と絵という二つのペイティさんの肖像とともに書かれたこうした台詞は、この作品が、偶然性に委ねられた街中での邂逅に多くを負っていること、現実と非現実の、あるいは夢や妄想との境界が不確かにぼやけてしまうのではないかという微かな危機感に満ちていることを示すのみならず、そうした二つの事態が本質的に深く結びついている、ということを示唆しているのではないだろうか。

そもそも街を歩くことそれ自体は能動的な営みであるが、そこに予定されない出会いがある時、その出会いに対して人は受動的たらざるを得ない。街をぶらついて何かに遭遇することは、歩くという行為の能動が、いわば「出遇わされる」という受動へと転化することであり、この主体の客体化の瞬間にこそ美が宿るのではないだろうか。清野は、『北区赤羽』の漫画を何か謎めいた力によって書かされていると感じると作品内で語っている。それはつまり、赤羽の街を彷徨うなかで連続して生じる些細な符号によって彼の創作そのものが導かれているということであるが、そうだとすればそうした受動性は、まさしく『ナジャ』の中で語られていた超現実的体験にどこかしら通じるものがあるのかもしれない。

『北区赤羽』に描かれるこのようなペイティさんの肖像は、ナジャだけでなく、これまた時代もジャンルも異なる作品ではあるが、19世紀フランスの作家、シャルル・ノディエの小説『パン屑の妖精』の登場人物であるパン屑の妖精と呼ばれる小人の老婆をもどこか彷彿とさせる。精神病院に入っている主人公の青年ミシェルがそれまでの彼の驚異に満ちた人生を語るという枠組みで展開されるこの小説の、一風変わったヒロインであるパン屑の妖精——ミシェルの子供時代から路上で生活している不思議な力を持つおばあさんで、ミシェルと結婚の約束をしている——もまたペイティさん同様、奇妙な歌を歌ったり、ときには喜びを爆発させながら跳ね回って踊ったりする。そしてこのパン屑の妖精もまた主人公の全く思いもよらないところ——例えば海岸の砂の中から——出現し、引き止めようとしたときには遥か遠くへ行ってしまう存在だ。

そしてナジャもまたもちろん、街で「向こうから来る」女の系譜に連なっている。ナジャとの最初の出会いの場面を見てみよう。

突然、まだ十歩ほども先に、反対方向から来る、とても貧しい身なりのひとりの若い女を見る。彼女もまた私を見ている、あるいは既に、私を見ていた¹¹。

10 清野とおる『ウヒョッ！東京都北区赤羽』第6巻、電子書籍版、双葉社、2019、102頁。

11 *Nadja*, p.72.

この描写は、語り手であるブルトンが、雑踏のなかからナジャを見つけた「主体」である以上に、ナジャによって見つけられた「客体」であるということを如実に示している。このようにブルトンを捉えるナジャはさらに、「動機はわかっている¹²」というような謎めいた微笑をも浮かべているのであり、出会いの瞬間、二人の間には不思議な共感が存在する。思えば『北区赤羽』においてもやはり、最初の遭遇の時にペティさんは多くの人が行き交う駅の構内で清野ただ一人に話しかけてきたのだった。



清野とおる『東京都北区赤羽』第1巻、Bbmf マガジン、電子書籍版、2011年、44頁。

街を歩いているときに「向こうから来る」ものによって奇跡的な体験が与えられる——それはおそらく、主体がある種の夢や幻想、ときには狂気へと自らを委ねることに他ならない。「夢は第二の人生」という書き出しから始まる、ジェラルド・ド・ネルヴァルの『オーレリア』において、序盤に語り手が真夜中、街を歩いていると偶然見上げた家の番地が自分の年齢と同じで

あった瞬間に強い衝撃を受け不吉な確信を得る場面、あるいはホフマンの『黄金の壺』において、意気消沈したアンセルムスが接骨木の木陰で金緑色の蛇と目を合わせた瞬間に衝撃的な喜びと苦しみに胸を打たれる場面。現実と幻想の敷居を踏み越え別の世界への扉を開ける瞬間に得られる確信とは常に、喜びであれ慄きであれ、とっさに得られる深い共感とともに有無を言わず自分を偶然導くものから与えられるのだ。そもそも夢そのものも、「眠りの最初の瞬間は死の似姿である¹³」というネルヴァルの言葉に示唆されるように、一度自らの客体化を引き受けた上でそこにコミットしてゆくものではなかっただろうか。

『北区赤羽』シリーズにおいてしばしば読者は、語り手の清野が赤羽という魔術的な街を歩くうちに見た白昼夢を追体験させられているような感覚を抱く。そこに描かれている様々な出会い、そして路上の体験の魅力の本質とは、それが街中に「あたりなかつたりする」ことであり、その偶然性に身を委ねる特権的な瞬間に宿る価値だ

12 Nadja, p.73.

13 Gérard de Nerval, *Aurélia, Les Nuits d'octobre, Pandora, Promenades et souvenirs*, Gallimard, « folio », 2014, p.123.

ろう。だからこそ私たちは、『ナジャ』岩波文庫版の注釈者である巖谷國士の言葉を借りれば、「未知への待機の間をもつて街路をさまようこと¹⁴」が再び各々の日常で可能になることを願ってやまないのではないだろうか。

14 ブルトン『ナジャ』巖谷國士訳、岩波書店、2010年、325頁。